

英国ロマン派主義の諸相について

—完—

富 田 光 明

拙論「英国ロマン主義の諸相について」(一)と(二)で、英国ロマン主義の発展過程を次のように捉えた。まず(一)では、英国ロマン主義の黎明期を迎える土壌となったゴシック主義文学の作家・作品に言及し、その(二)では初期及び前期ロマン派の詩人に言及し、主要な作家としてブレック、ワーズワスとコールリッジに焦点をあてた。そしてこの(完)では、英国ロマン主義完成期に若くしてこの世を去った詩人達即ちバイロン、シェリーそしてキーツの三人のロマン派詩人を取り上げ、彼らの思想が生み出された時代を鑑み、彼らの人生及び作品を通して、英国ロマン主義の諸相について述べることにする。即ち英国ロマン主義の流れと詩人たちの作品・価値観などを通して、映し出す諸相を知ることができると思うのである。

拙論(一)では、ロマン主義の黎明期にあたるゴシック・ロマンスの発生に言及し、その時代に輩出したE・ヤング(1683-1763)やT・グレー(1716-77)など“憂鬱の詩人群”により、英国ロマン主義の種が蒔かれた経緯を知ることができる。次の拙論(二)では、この思潮が次の世代の詩人W・ブレック(1758-1827)、W・ワーズワス(1770-1850)及びT・S・コールリッジ(1772-1834)へと継承されていったことが分かる。その影響下でワーズワスとコールリッジ共著の無署名詩集『抒情歌謡集』が、1798年にはロンドンとブリストルの2か所で出版された。この出版はまさしく英国詩史上ロマンティック・リバイバル(Romantic Revival)の夜明けを示すものであり、その後の英文学史史上多大な影響を与えることになった。

ワーズワスは1800年に再版の序文で、「詩は力に満ちた感情が自然に溢れ出たものであり、その起源は心の平安な状態で想い起こされた感情である」と主張している。また彼は詩語を特別意識せず、むしろ一般の人々の言葉を用いるべきであるとも、提唱している。この彼の考えは一世代前の詩人との比較から生じたのである。即ち「理性」に基き従来の規範を重視したA・ポーブ(1688-1744)達の詩人の表現では、一般の人心を掴むことは難しい、詩人自身の真情も伝わりにくい、とワーズワスは確信し、そこで一般の人々にも理解できるような上記の『抒情歌謡詩集』が出版された。この出版はまさしくポーブを代表とする新古典主義の終焉を告げることであった。

このように新古典主義が姿を消した英文学の世界で、イギリス・ロマン主義の代表詩人

であるワーズワスとコールリッジ達が、人生に対してどのような態度で接したのか考察を試みることにする。彼らの詩作品を通して鑑みると、そこには紛れもなく“若さ”への彼らの賛美が見られる。確かにこの時代は、アメリカの独立（1776年）及びフランス革命（1789年）の時代であった。これらの革命はもちろん“若さ”というエネルギーなしでは、到底実現するものではないことは周知のごとくであった。ついに小さな島国ブリテン島にも時代の思潮が否応なしで押し寄せてきたのであった。

上記初期ロマン派詩人達が活躍をした‘若き時代’である1700年代中葉も過ぎ、その後に登場してきた主要な詩人達は、それなりに個性的な詩人達であった。彼らは自分自身の英国ロマン派主義を探し、その思想を詩に託し、それらの詩作品を通して、英国ロマン主義を英国国内のみならずヨーロッパの国々に多大な影響を与えたことは否めない。実際にそれまでの英文学の歴史を振り返ってみても、この時代ほど英文学が世界で輝いていた時代はなかったのではないだろうか。

当時19世紀の英国は、1805年トラファルガーの戦いでネルソンの率いる英国海軍がフランス艦隊を破り、また1815年にはベルギーのワーテルローの戦いで、ウェリントン公とブリュッシャー元帥がナポレオンを破った。これらによって英国にとって往年恐怖の存在であったフランスは、取るに足らぬ存在となった。まさにこの時代に英国は変転を迎えることになる。国内ではジョージ3世が病から廃人となり、息子が1811年に＜摂政の宮＞となった。後のジョージ4世である。ジョージ4世の時代に入った19世紀初期は、産業革命が本格的に実績をあげてきていた。皮肉にもそれに伴って貧富の格差が生じ、抗議や反乱に至る所で見られるのであった。穀物法——輸入穀物に対し高い関税をかけ、国内の農業を保護することによって、高い小作料を確保しようとの法——に対する暴動や、機械の破壊活動運動が盛んになった。

たしかにジョージ4世は為政者としてみれば不合格であるだろうが、しかし文化・芸術の面からみれば、彼の存在はとても大きかったといえる。当時有名な作家や芸術家で、ジョージ4世からの激励や援助を受けなかった者はほとんどいない。国王の我儘とぜいたくと怠惰な遊び好きを、みんなと一緒に貶していたバイロンでさえ、国王を「尊大な怪物」呼ばわりをしながらも、文学を見る目には非の打ち所がないと認めている。（「イギリス物語」—小池滋監訳植松靖夫訳—東洋書林）

このようにしてこの時代の申し子であるバイロンとシェリーそしてキーツの人生からも、英国ロマン主義がもたらした一面を伺え知ることができるのではないかと思える。

序

拙論『英国ロマン派主義の諸相について』（完）で取り上げるロマン派の主要三詩人、Byron George Gordon, 6th Baron, (1788–1824)、Percy Bysshe Shelley (1792–1822) そしてJohn Keats (1795–1821) について、‘変革’ というキーワードで彼らの文学史上の足跡を概略的に述べる。これによって英国ロマン主義の諸相が一層明確となると思うのである。

< バイロン (1788–1824) >

バイロンはスコットランド王家の血をひく母と陸軍大尉の父（因みに祖父は海軍）との間に、長男として1788–1828年ロンドンで生まれた。生まれつき足に障害があることによって、屈辱感・劣等感を持つ。と同時に一方でバイロンは10歳で第6代バイロン男爵の称号を引き継ぐことによって、貴族の誇りと優越感を持つ。このような状況の中で、彼は複雑な人間へと成長して行く。家庭的愛にも決して恵まれなかった。借金に追われフランスに逃れる父（バイロンが3歳の時に客死）との不遇のなかで幼少時を過ごし、子供を溺愛する一方で癪癪の強い母親のもとにバイロンは育つのであった。彼はCambridge大学 Trinity Collegeで学んだ。早熟であったバイロンは、1803年（15歳）の夏2歳上のある女性に求婚をしたが、拒否された。このような彼の行為の背景には、彼の家庭的に不安定な環境による産物であろう。バイロンは家庭的愛情の欠如から、常に理想の母親像・女性像（傾向として年上）を死ぬまで、追い求める人間となったとも言えるのであろう。

バイロンの詩業を代表する長編詩Childe Harold's Pilgrimage（1～2巻は1812年、3巻は1816年、4巻は1818年、因みにChildeとはKnightになる前の高貴な身分の若者、御曹司である）は、1809年～11年に友人と地中海沿海 ポルトガル、スペイン、ギリシャそしてコンスタンチンノーブルを旅した時の紀行文のようなものであった。この長編詩にはまたいくつかの優れた詩の小品が、宝石のごとく鏤められている。第1～2巻（1812年）が出版され、本人も思いもよらない成功を収めたために、バイロンは一躍社交界の寵児となる。この紀行文は、異国情緒と自由な思想そして詩風により人々の人気の的となり、この時かの有名な文句、‘I awoke one morning and found myself famous.’（ある朝私は目を覚ますと、自分が有名になっていた）が、バイロンの口から生まれるほど、その時代の寵児となった。この頃バイロンはアイルランドの詩人トーマス・モア（後年バイロンの伝記を書く）とも知り合うのであった。

美青年であり情熱の詩人バイロンは、常に女性問題（因みに10人以上の女性とのゴシップあり）を引き起こしていた。ついに女性問題から彼に対する世評が悪くなり、英国には居られなくなり、1816年英国を去りヨーロッパに渡る。因みに彼はこれを境に二度と英国の土を踏むことはなかった。彼はWaterloo, Rhine川そしてGeneva に留まった時の出来事

を中心に、Childe Harold'sの第3巻を書いた。その後Veniceに行き赴き、途上の感想を第4巻として、1818年にChilde Harold's Pilgrimageを完成させるのである。

次に出版されたバイロンの主要作といわれるManfred (1817) は、ゲーテのファーストから暗示を得たとも言われ、中世スイスの城主マンフレッドの行動を通し、詩人の自我意識を強烈に表現した詩劇である。またこの2年後にはセリビアの青年ドン・ジュアンの生涯を描いたDon Juan (1818~24) がある。この長編詩は16歳の時に人妻と不倫を犯した罪で、国外に逃れ、各地を転々と放浪し、英国に辿り着き、英国のブルジュア階級の支配を非難するといった作品で、未完の長編詩である。上記バイロンの主要作品Childe Harold's、ManfredそしてDon Juanにはバイロン自身の影が読み取れる。いわば作品の主人公はバイロンの分身とも考えられる。当時の作家でバイロンほど作品の登場人物に、自己自身を投影した作家はいなかったであろう。

若かりし日の体験—トルコによるギリシャ圧政の出来事—が、バイロンの脳裏に焼き付けられ、彼からは離れられなかった。30歳を過ぎた頃にはバイロンは哀れにも己の状況(心身共に)を十分に理解しており、人生最後の舞台としてギリシャを選び、義心を貫き人生の幕を閉じようと考えた。ついに1823年バイロンの心に火がつき、ギリシャ独立義勇軍に参加することになった。そこで自分の義勇軍を結成し、ミソロンギに上陸し戦闘態勢に入っていたが、志半ばで熱病に罹り、ギリシャのミソロンギにて36歳で客死した。バイロンは常にヒーロ役を演技続けたのであった。これこそ正しく没落貴族のプライドからであっただろう。

< シェリー (1792-1822) >

シェリーはロマン派主義に興味を持ったと同時に、社会革命にも興味を示した詩人でもあった。準男爵で富豪の地主の長男として、サセックスで生まれた。端正な顔立ちの少年で、性格は短気であり、いくつかの奇行歴があり、怪奇なものに対して異常に興味を抱いた。伝統ある有名なEton校に入るが、あまり校風になじめず、古典文学及び科学文学などを読み漁り、ゴシック小説などを匿名で出版するほどの文学青年であった。そして1810年Oxford大学University Collegeに入学した。この頃から社会科学者のゴドウィン、トーマス・ペインなどからの革命思想の影響を受け、The Necessity of Atheism『無神論の必要性』をHoggと共同出版をした。そしてその罪で彼と共にシェリーは放校の命を受け、大学を中途退学ことになる。復学を求める父親の願いを拒否し、ロンドンを去る。妹の学友で16歳のHarriet (宗教問題で迫害されていることへの同情) を連れエディンバラに行き、彼女と結婚をする。

またアイルランド問題に関心を抱いたシェリーは、1812年ダブリンに渡り、カトリック教徒の解放とアイルランドの独立とを主張した。翌年の1813年頃から理想主義を標榜にし

たシェリーには、自由の精神をテーマにした作品が多くある。彼の代表作を二つほど取り上げてみる。一つは18歳の時に書いたQueen Mab『マブ姫』（1813年）があり、これは妖精の女王マブが語るこの世の悪の物語であり、キリスト教の道徳が諸悪の根源として考えられ、‘人間による悪は外部の変革によってのみ除去できる’と主張した。この作品の考え方は、後の政治的思想となり、ラディカルな人々に大きな影響力となった。これは勿論Oxford大学を放校させられた原因の「無神論の必要性」を想起させるものである。これも当時出版社が世評を恐れ、出版社自身が出版を拒否した。

もう一つ彼の代表作の一つとして、1820年に書かれた詩劇Prometheus Unboundがある。ギリシャ神話のプロメテウス伝説から想を得て、ギリシャ劇に近い形式を用い、4幕からなる。第1幕は暴君ジュピターによって、コーカサス山の岩に鎖に繋がれたプロメテウスが、暴力に屈しない強靱な精神力を人間に示す。第2幕では愛の化身Asiaと宇宙の根源力の象徴のDemogorgonが登場。第3幕はこのDemogorgonのためにジュピターは没落し、プロメテウスがヘラクレスによって鎖が解かれ、自由と愛の新世界が火焼かれる。第4幕では時の精と人間の心の精とが遊びをうたい、月と地球とが唱和し、最後にDemogorgonが荘重な態度で歓喜にみちた万物の精を祝福する。

シェリーは上記のような長編詩や抒情詩劇を書く一方で、珠玉の抒情短詩も多く描いた。例えば‘To a skylark’ ‘Ode to the West Wind’ ‘The Cloud’ 等の作品がある。またキーツの死を悼んだ哀悼詩‘Adonais’もある。同年には、英国の詩論中の古典と言われている‘A Defense of Poetry’（出版は1840年）があり、この評論文は詩における想像力の自律性と道徳的機能を論じ、「世の立法者」としての詩人の態度を明らかにしたものである。

イタリアに渡り滞在していたシェリーは、1822年英国から遙々イタリアにやってきたリー・ハント一家に会いにヨット‘エアリエル’号で7月Legornに行き、Pisaを案内し、その帰路海上Legorn沖のSpezzia湾で7月嵐に遭い、ヨットが転覆しシェリーは溺死した。転覆した船内のシェリーの上着のポケットには、ソフォクレスの戯曲集と、もう一方のポケットにはキーツの詩集が、「聖アグネス祭の前夜」の箇所が開かれたままであった。これはいかにも読書の中に嵐に襲われたことを物語っている。この詩集はハントとから借りたもので、火葬の時に焼かれたが、ソフォクレスの戯曲集は、オックスフォード大学のボードノアレ図書館に寄贈された。（研究社「英米文学評伝叢書」復刻版 シェリー 矢野禾積 著 昭和55年）遺体はバイロン、ハントとトレローニの前で荼毘に付せられた。享年30歳であった。翌年ローマ郊外のプロテスタントの墓地にキーツと共に葬られた。

シェリーはブラウニング、オーエン、モリス、イェーツ、オーウェルなどの文学者をはじめとし、あらゆる分野にわたり‘Radical Shelly’として今もなお大きな影響力を与え続けている。（研究社『イギリス文学辞典』上田和夫 編 2004年）

< キーツ (1795-1821) >

キーツは1795年ロンドン市内で、3男1女の長男として生まれた。幼少の頃にはすでに両親を失い、家庭的には恵まれなかった。それだけに弟妹への愛情は大きかった。彼はバイロンより7歳年下で、シェリーよりは3歳年下の文学青年であった。英文学史からみてもこの3詩人ほどお互い生涯を通して影響し合い、英国の文学世界を構築した詩人達として、英文学史を通して見ても皆無と言っても過言ではない。これら三人の英国ロマン派詩人達は、単に母国である英国だけでなく、ヨーロッパおよび日本を始めとし、世界中に広く影響を与えたことは明白である。

彼ら3人のうちキーツだけが、バイロン（ケンブリッジ大学）やシェリー（オックスフォード大学）のような大学教育を受けていない。またラテン語・歴史の知識及び多少フランス語の知識があっても、ギリシャ語は全く知らなかったと言われている。にもかかわらず、他の2詩人以上にキーツはギリシャ・ローマの世界に足を踏み込み、ギリシャ神話芸術から無限の薫陶を受け、自分の詩作に活かした詩人はあまりいない。

16歳のときHammondの書生となり、外科医の弟子となる。21歳の時には医学を修め1816年医師の試験に合格し、Guy's病院で外科の助手となった。助手としての辛い日々をなんとか彼を癒してくれたものは、幼年に入学した私塾クラーク学校長の息子によって知った文学・詩歌の世界であろう。実際キーツは彼から文学の手ほどきを受け、スペンサーやエリザベス朝詩人達の詩歌の世界に出会い、詩歌の世界に興味を持っていた。開業の免許を取得し、実際に外科の助手になったにもかかわらず、文学の世界から身を引くことが、キーツにはどうしてもできなかった。ついにキーツは医学への道を断念し、文学の世界に入ってしまった。

この頃すでにキーツは学友のクラークを通し、ハント、ハズリットたちと知り合い、この年の12月にキーツは詩人としての出船を示すソネット 'On First Looking into Chapman's Homer' を書く。それ以降キーツは詩人としてひたすら進み続けるのであった。1817年4月ワイ島を旅行中に長編詩Endymionを書き始め、1818年4月に出版。しかしこの出版に関しBlackwood's MagazineとQuarterly Reviewから酷評を受けた。この酷評は若き詩人にかなりの打撃となり、この打撃は後々まで尾を引くにことになった。今と同様昔も、このように若き文人はジャーナリズムから酷評の洗礼を受けることであった。

弟ジョージが結婚してアメリカに移住することで、淋しさが増すなかで、キーツは肺結核で患っている弟を看病しながら、詩作に励むのであった。1819年には物語詩 'The Eve of St. Agnes' が完成する。この年の4月頃キーツはFanny Browne嬢と婚約し、詩作の点で最も輝ける年であり、キーツにとってまさに1819年はannus mirabilis（驚異の年）となり、同年 'La Bell Dame sans Merci', 'Eve of St. Mark'（未完）が書かれ、そして最も

優れた六大オード群 ‘Ode on a Grecian Urn’ ‘Ode to a Nightingale’ ‘To Autumn’ ‘On Melancholy’ ‘On Indolence’ ‘To Psyche’ が書かれた。このようにキーツには詩神ミューズが舞い降り、それを素直に享受し、英詩の珠玉を英文学史上に残した。

キーツは1819年に入ると、肺結核の症状が顕著となり、最初はハント家の人々のお世話になり、のちにはファニー・ブローン家の人々の看護を受けることになった。病状が一向に好転しない状態であったので、転地治療のため気候の良い暖かい南国イタリアに行く決意をする。この年の9月に画家のセヴァンが同行し、イタリアに向け出港、11月ナポリに4泊ほどし、シェリーのピサへの招待を断り、ローマに着き、翌年の1821年2月ローマで客死。ローマのプロテスタントの墓地（シェリーと同じ墓地）に埋葬された。

キーツの最後の詩ソネット ‘Bright Star’（「煌めく星」）は、イタリアに向けイギリスを船出した船上で当然恋人ファニーを想い、書かれたものである。そしてキーツはイタリアまで同行してくれたセヴァンに次のようなかの有名な墓碑銘を依頼したのであった。

Here Lies One Whose Name was Writ in Water

その名が 水に 書かれし者 ここに眠る

本 論

上記3詩人の短き人生及び詩作活動に照らし合わせて、その詩人の代表的な作品を鑑賞していく。これによって、多少なりともその詩人を育んだ思想と価値観が明確となり、彼らが生きた時代、即ち英国ロマン主義の側面が浮き彫りにされてくると思う。尚、今回は和訳を表示しない。その理由は紙面の都合と同時に、作品を原詩で味わっていただきたいと願うからである。

< バイロン >

----- ‘ She walks in beauty ’ -----

I

She walks in beauty, like the night
Of cloudless climes and starry skies;
And all that's best of dark and bright
Meet in her aspect and her eyes :
Thus mellow'd to that tender light

Which heaven to gaudy day denies.

II

One shade the more, one rays the less,
Had half impair'd the names less grace
Which waves in every raven tress,
Or softly lighens o'er her face ;
Which thoughts serenely sweet express
How pure, how dear their dwelling-place.

III

And on that cheek, and o'er that brow,
So soft ,so calm , yet eloquent,
The smiles that win ,the tints that glow,
But tell of days in goodness spent,
A mind at peace with all below,
A heart whose love is innocent !

この短詩は、バイロンの従兄に嫁いだ貴婦人ウィルテットを歌ったものであり、バイロン20歳の作品である。英国ロマン派の詩人のうちバイロンほどに「愛」を扱った詩人は少ない。この作品には、異性に対する異常な感覚を示している、早熟な青年が浮き彫りにされている。

第一スタンザでは、女性の歩き方にスポットが当てられている。女性の歩き方に関心をもち観察をするということは、いかに彼が異性に対し異常な関心を持っていたかを物語るものである。しかも彼女の歩きを、叢雲のない星の降る夜空に譬え、彼女をいっそう魅惑的な存在として想像する。これはイメージの世界に生きるロマン派の詩人の典型を示すものとなる。このスタンザでは、光と闇との二面性を持つ女性の魔性が実に鋭く描かれている。

第二スタンザでは次の詩句 'One shade the more , one ray the less, /Had half Impaired the nameless grace/Which waves in every raven tress, /Or softly lighens O'er her face; 「影一つ増えても、光が一つ少なくなっても、表現しがたい優雅さが損われるだろう、烏の濡れ羽色の黒髪に漂う、またやさしく顔を照らすあの優雅さを」は、若き詩人の心をすっかり虜にする魔性が潜み、女性本人は気づいてはいないが、なにげなく彼女の仕草を通して見せる官能美の凄みを示している。

第三スタンザでは、女性のすべてを物語るものとして、バイロンは女性のスマイルに焦点を当てる。スマイルへの視線は人間をまず愛しい存在としてとらえるバイロンの人間像を示してくれる。そしてsmileにはmind（精神）とheart（心）との融合があると考ええる。

またloveが穢れなきものであればあるほど、人の心を惹きつけその女性に光が一層増すのであると、バイロンは考えるのであろう。ここに人間への讃歌を歌うバイロンの姿を見るのである。

バイロンのMelodies of Loveについて、上島建吉氏は彼の著「ロマン派詩選」（研究社小英文叢書）の中で、次のように述べている。

Byronの恋愛詩が喜ばれるのは、どちらかと言えば古典手的な均整美、形式美のゆえである。ほかの詩人たちと違って、Byronは恋愛詩に全霊を傾けることはしない。いや、恋愛そのものが遊びだったと言える。その余裕や客観性が、洗練された情緒と完成した表現とを生み出したと考えられる。なかでも明暗交錯だけで淑女の美をあらわした“*She Walk in Beauty*”は最も古典的な完成品である。

下記の詩篇The Oceanは7連から成り立っている。紙面の都合から拙論では、主題のテーマを提示していると思われる最初のスタンザと最後のスタンザとを観賞していく。この方法でもバイロンの海に対する捉え方・感じ方を知ることができるのである。

この詩篇はローマ近郊のアルバン山からティレニア海を見下ろした時の感動を歌ったものであり、チャイルド・ハロルドに掲載された詩で彼が29歳の時の作品である。

The Ocean

There is a pleasure in the pathless woods,
There is a rapture on the lonely shore,
There is society, where none intrudes,
By the deep Sea, and music in its roar:
I love not Man the less, but Nature more,
From these our interviews, in which I steal
From all I may be, or have been before,
To mingle with the Universe, and feel
What I can ne'er express, yet cannot all conceal.

冒頭のスタンザに見られるa pleasure in the pathless, /a rapture on the lonely/society, …in its roar : (2～4行)の詩句には、世間の目から逃れようと願うバイロン姿が読み取

れる。実際にこの頃彼は浮名を流しており、特に上流社会の麗人から冷たい目で見られていたのであった。それ故にバイロン自身の人間に対する異常なまでの関心（特に麗人に対し）愛着を持つ自分の心の高揚を何とか鎮静させようと、バイロンは次の言葉を発するのである。‘I love not Man the less, but Nature more’（私は人間を愛さないというわけではないが、自然の方を一層愛すのである。）そこでバイロンは真摯に海と対話することによって、今までの生き方すなわち世間から脚光を浴びることを常に意識する自分と決別を願う。

今こそかつての己れから逃れ、宇宙との融合を願うことにより、今まで感じなかったものを感じることが可能になることを、彼は感じ取るのであった。

最終連は下記のとおりである。

And I have loved thee, Ocean ! and my joy
Of youthful sports was on thy breast to be
Borne, like thy bubbles, onward: from a boy
I wanton'd with thy breakers — they to me
Were a delight ; and if the freshening sea
Made them a terror — t'was a pleasing fear
For I was as it were a child of thee,
And trusted to thy billows far and near,
And laid my hand upon thy mane — as I do here.

海の激しさ・凄まじさ、そして恐ろしさが、第6スタンザまで描かれているが、バイロンはそれでも最後の第7スタンザで、海から撤退しようとは決して思わない。いやむしろ一層海を愛してしまった自分を描いている。海に苦しめられても今でも海への憧れの気持ちは持続しているのである。その根拠は“and I have loved thee, Ocean !”このセンテンスが現在完了形となっているところから推測ができ、つねにバイロンは海との関わりを持ち、永遠に海に抱かれていたい願望を持っていることで理解できるのである。極端に言えば海に身柄を託してしまい、海との一体感を望む表現でもある。

バイロンにとって、海は怖い存在ではあり、時には破壊者にも成り得る。またそれと相反して、時には海には母の胸に抱かれる安心感もある。そして最終的にバイロンが海に求めるものは、破壊力のある宇宙のエネルギーそしてこのエネルギーの中に飲み込まれることによって、個という小さな世界から広大な宇宙へ脱皮することが可能となる願望である。

バイロンの詩作品を通して彼の晩年を知るためには、上記の詩篇が最適であろう。因みに‘She walks in beauty’はバイロンが26歳の時な作品であり、‘Apostrophe to the Ocean’は29歳の作品であり、下記の‘On This Day I Complete My Thirty-sixth Year’は最晩年36歳1824年の作品である。

最晩年の詩はギリシャ独立義勇軍に参加したバイロンがミソロンギで病に罹り、自分の死期を悟った折に書かれた作品といわれている。実際にこの詩を書いた3ヶ月後にバイロンは他界した。この詩は4行から構成されたスタンザ（連）で書かれており、10連で完成している。少し長いので冒頭の連と最後の連を観賞し、他の連は割愛をする。しかし各連のキーワードを指摘してこの詩編の全体像を示したい。

下記の第一連には並々ならぬバイロンの意志の強さを感じることができる。

< 1 連 >

‘Tis time this heart should be unmoved,

Since other it hath ceased to move:

Yet, though I cannot be beloved,

Still let me love !

いまや 心は静かなるべし。

心が他人を揺り動かさなくなったので。

もはや 私は神から愛されることがないが、

でも 私に愛することを お許しください。

このようにギリシャ独立のために、バイロンの血は騒ぐのである。この連から判断しても、mindでなくheartがバイロンを支配している。またバイロンのような行動派の人にとって、このような無気力状態のギリシアこそとてももどかしい。そこでプライドも手伝って、彼は‘still let me love !’と自己中心的な態度を示し、自分を奮い立たせざるを得ないのである。

以下に各連のキーワードを列挙する。

< 第2連 >

in the yellow leaf, /are gone, /alone

上記の語句からバイロンが色あせた今の自分を表現している。

< 第3連 >

lone as some volcanic, /a funeral pile

火山のようにかつては燃えたぎっていた自分はもはやなし。

< 第4連 >

I cannot share, /But wear the chain

バイロンの活力になった要素（感情）はもはやかつてのように、分ちあうことはできないが、しかしそれらとのつながりはいまでも存在している。

< 第5連 >

Such thoughts should shake my soul, now now

自己との葛藤があつてこそ、心を揺り動かすものがあつたが、今はない。

< 第6連 >

The Spartan, /borne upon his shield,

かつて勇猛果敢なスパルタの兵士は戦死しても、自由はなかったのである。

< 第7連 >

Awake, my spirit ! 「目覚めよ、わが魂よ ! 」

己の不甲斐無さを嘆き、モチベーションを高めようとしている。

< 第8連 >

unto thee/Indifferent should the smile or frown/Of beauty be.

もはや麗人の振舞いには、一応無関心になった己れを表現している。

< 第9連 >

The land of honourable death/ Is here:

名誉の死に場所は、このギリシアであると、バイロンは悟るのである。

< 最終連 >

Seek out —less often sought than found—

A soldier's grave, for thee the best;

Then look around, and choose thy ground,

And take thy rest.

探し求めよー無理に死を求める兵士はいないのだー

兵士の墓を。汝にとってそれは最良のことである。

それからあたりを見回して、汝の場所を選び、

そして安らぎなさい。

‘less often sought than found’は「多くの兵士は死んでいくが、決して自分から死んでいくのではない。」と読み取れるが故に、これは‘Seek out’を強めるものであるとともに、バイロンが自分自身を鼓舞していることになる。次に‘And take thy rest’はギリシャへの永遠の愛を誓うことを、バイロンが宣言したと同時に、彼は貴族としてのプライドを堅持したかったのではないだろうか。彼はこの詩を書いて3か月後に亡くなった。この詩に関して上島建吉氏は彼の著『ロマン派詩選』（研究社、昭和59年）の説で、次のようにコメントしている。バイロンの人生そのものを評した興味深いコメントであるので、ここに引用する。

バイロンの虚構的な精神を彩ったあらゆる虚構、あらゆる仮面、あらゆる修辞が今はもう去った。恋さえ彼をだませなくなった。残るものは身を内から焼きつくす孤独な、やり場のない情熱の火だけである。詩人はここで最後の力を振り絞る。技巧の限りを尽くして、自由の大義に殉ずるという虚構にわが身をゆだねようとする。「目覚めよ、わが魂！考えよ…！」だがPrometheusの幻影は二度と戻ってこない。自己の死は世界の勝利と結びつかない。詩人を待っているものは、名もない「一兵士の墓」でしかなかったのである。

< シェリー >

下記の詩篇は1816年夏バイロンとレマン湖あたりを散策していたとき、詩想を得て書いたものだといわれている。各スタンザが12行から成り立っていて、7スタンザで完成している詩篇であり、シェリーの特色ある理論的かつ理想を歌ったものである。“Intellectual Beauty”とは肉眼を通してとらえた美しさに知性及び理性が与えられたことによって得られる「美の精」である。

この詩篇はバイロンの‘On this day I complete my thirty-sixth year’と同様に、決して短詩とはいえないので、冒頭のスタンザと最後のスタンザを観賞していく。その他のスタンザに関しては、キーワードを取り上げ、詩の全体像を示したい。

Hymn to Intellectual Beauty

< 第1スタンザ >

The awful shadow of some unseen Power
Floats through unseen amongst us, – visiting
This various world with as inconstant wing
As summer winds that creep from flower to flower, —
Like moonbeams that behind some piny mountain shower,
It visits with inconstant glance
Each human heart and countenance ;
Like hues and harmonies of evening, —
Like cloud in starlight widely spread, —
Like memory of music fled, —
Like aught that for its grace may be
Dear, and yet dearer for its mystery.

この最初の2行“The awful shadows of some unseen Power/Floats though unseen among us, / 「目には見えない或る<力>の畏れの影が、我々の間を目に見えないように、浮遊するのだ。」には、幼少のころから霊的なものを感じ取っていたシェリーを浮き彫りにしている。彼は感覚的というよりもむしろ理性的に物事をとらえている。

或<力>の畏れの影は、“夏風のように” “月光のように” “夕暮れとの色合いと調和” “星の光を浴び拡がる雲”そして“消え去る音の調べ”などから生まれるものである。この“影”に優雅さを感じるが、それ以上に神秘さをも感じると表すシェリーは、バイロンやキーツとは異なり、観念的な詩人の一面を見せている。

< 第2スタンザ >

Spirit of Beauty, (美の霊) /where art thou gone? (美の霊汝は何処に行ったのか?)

< 第3スタンザ >

Thy light alone .../Gives grace and truth to life's unquiet dream (汝の光のみが人生の不穏な夢に優美と真実を与えてくれる。)

< 第4スタンザ >

Love, Hope, and Self-esteem, like clouds depart/And come, for some uncertain

Moments lent. (愛、希望、そして自尊は、不確かで限られた時にだけいて、雲のように去っていってしまう。)

< 第5スタンザ >

Sudden, thy shadow fell on me; /I shrieked , and clasped my hands in ecstasy!
(突然 汝の影が私に訪れた。私は声を張り上げ、手を握りしめ、うっとりとした。)

< 第6スタンザ >

O awful Loveliness, /Wouldst give whate'er these words cannot express.
(おお 畏れ多き愛よ、汝なら言葉では表せられないほどの全てをお与えて下さるでしょうに。)

< 最終スタンザ >

The day becomes more solemn and serene
When noon is past — there is a harmony
In autumn, and a lustre in its sky
Which through the summer is not heard or seen,
As if it could not be, as if it had not been!
Thus let thy power , which like the truth
Of nature on my passive youth
Descended, to my onward life supply
Its calm —to one who worships thee,
And every from containing thee,
Whom, Spirit fair, thy spells did bind
To fear himself, and love all human kind.

最後の7行にシェリーの切なる願望と彼のアイデンティティーが垣間見られる。即ち thy power, /the truth of nature, /my passive youth, /my onward life, /its calm/Spirit fair, /thy spell, /all human kind の名詞類から髣髴するイメージと、次ぎの動詞類 let …descended, /supply, /worships, /bind to fear himself, and love から想像できる彼の行動力が一致して初めて、理想美に捧げる讃歌をうたったシェリーが、浮き彫りにされてくるのである。

この詩に関して上島建吉氏は、「ロマン派詩選」(研究社小英文叢書)の注釈(p.135)で実に的確に纏めたコメントを付けているので、それを下記に示すことにする。

自然界にたゆとう美の気配のようなもの、真理の予感のようなものの背後に「美の霊」という実存を発見したことは、詩人の幼い頃からの魂の憧れをNarcissismの深淵から救い出すことに役立った。内から発した美的衝動を外から来たものの如くみなす — ここにロマン派の美学の、哲学の、道徳の無意識的なからくりがあると言っていい。かくして自然へのひそかな憧れ、孤独なvision は、広く人類を愛し、世界を改革し、美と真理の理想を実現数する可能性として晴れてその価値を認められる。「自己愛」は「自尊心」に生まれ変わる。「自己を恐れる」というのも、外在化され宇宙大にされた自己の想像力への畏敬にはかならない。

Hymn To Intellectual Beautyを書いた3年後にシェリーは彼の代表Ode To The West Wind「西風に寄せるオード」を書いた。この詩の製作事情について彼自身が下記のようなコメントを残している。

この詩はフローレンスの近くで、アルノを取り囲む森の中で想を練り、とても良く書かれた詩である。嵐のような風—気象は穏やかになったり時には威勢良くなったりが、秋雨を降り注ぐような水蒸気をかき集めていたある一日であった。私が予見したように、入日の頃にはヒョオウと雨とが混ざり合い、嵐のように激しく降り始める。その地方独特の威風堂々の雷と稲光をともなって。

この詩の詩形はterza rimaでダンテの神曲から学んだものと言われている。英詩では大変に成功した例であるといわれている。このオードは5連から成立している。各連で重要な詩句を取り上げて、このオード全体をとらえてみる。

< 1 連 >

O wild West Wind, thou breath of Autumn's being
Thou, from whose unseen presence the leaves dead
Are driven, like ghost from an enchanter fleeing,

「ああ、奔放な西風よ。汝は秋の存在としてのシンボルである。姿の見えぬ汝の力で、枯葉が舞い散る。それは魔法使いから逃れてきた亡霊達のように！」と西風を擬人法で語りかけ、自然現象のエネルギーを神の存在として

Wild Spirit, which art moving everywhere ;
Destroyer and preserver ; hear, oh, hear!

自由奔放の西風の存在は大きい。その存在は破壊者にして保護者であり、一見矛盾しているように思えるがしかしそうではない。それは自然の周期に従ったままのことである。それ故に西風は単なる風ではなく、霊的な力としての存在と考えられている。

< 第2連 >

Thou dirge

Of the dying year, to which this closing night
Will be the dome of a vast sepulchre,

この第2連では 'dying year' 「暮れゆく歳」、'closing night' 「沈みゆく夜」、'vast sepulcher' 「巨大な墳墓」などの語が、視覚に読者を引き込むのである。

< 第3連 >

Thy voice, and suddenly grow gray with fear,
And tremble and despoil themselves : oh, hear !

この連は前半、静寂の世界、眠りの世界のイメージであったが、この詩句によって静から動へと展開し、あらためて西風のエネルギーの強さを感じさせるものである。

< 第4連 >

Oh, lift me as a wave, a leaf, a cloud!
I fall upon the thorns of life! I bleed!

自分は木の葉のように微力である。だからこそ西風のエネルギーを享受し、自分の人生を意義あるものにさせたいと願うのである。

< 第5連 >

Be thou , Sprit fierce,
My spirit ! Be thou me, impetuous one!

「凄まじい精よ、汝は私の精神となれ。汝は私となってくれ、強烈なものよ」の詩行はシェリーが身を西風に托す心境を語っている。

The trumpet of a prophecy ! O, Wind,

If Winter comes, can Spring be far behind?

最後の一行 'If Winter comes, can Spring be far behind?' 「冬来りなば、春遠からじ」は人口に膾炙された名句であり、理性と自然の摂理を重んじるシェリーの純粋な心が、この詩句に読み取れる。

上島氏は「西風」を「自分」との関係を下記のように記している。実に卓見である。

いままで意のままにしてきた枯葉や雲や波と同列にわが身をおいて、「西風」の助力を、その＜靈感＞を仰ぐのである。このように、自分がもはや「西風」そのものではなく、「西風」によって吹き鳴らされる楽器にすぎないと自覚することは、必ずしも詩魂の衰退や凋落のみ意味しない。たしかに靈感なくして詩は書けぬ。が同時に、「西風」が森によって音を立てるように、靈感も詩人の「唇」なしにその存在を示すことはできない。Shelleyはかくして詩作原理の真実に目覚めたことになる。すなわち自らが＜靈感＞となることを止め、＜靈感＞の「司祭」に、それを語る「言葉」になることを知ったのである。(Prose Quotations No.5 参照)

シェリーはキーツをこよなく愛していた。兄と弟のような年齢の差もあってか、また詩作においてまた能力と人間的に於いても、シェリーはキーツを愛していた。その証拠として、シェリーが船の難破で溺死したときに、彼のポケットにはキーツの詩集があり、「聖アグネス祭の前夜」が開かれたままであったという事実から、伺うことができる。

シェリーの詩“墓碑銘”こそが二人の永遠の友の契りを語っている。その一編の詩を下記に記す。

E p i t a p h

These are two friend whose lines were undivided
So let their memory be, now they have glided
Under the grave ; let not their bones be parted,
For their two heart in life were single-hearted.

ここに二人の詩人あり、二人は分け難き間柄
それ故二人の思い出もそうしておこう。いまでは墓の下で
横たわっている二人の亡骸も一緒にしておこう。
二人の心が本当に一つとなっているのだから（私訳）

< キーツ >

英国浪漫派の詩人のうち、キーツほどギリシャ・ローマ世界に憧れ抱き、ギリシャ・ローマ文化を愛した詩人はいない。確かにバイロンはギリシャ独立戦争に従軍し、ギリシャをトルコの圧政から救い出そうとした。しかし志半ばでギリシャのミソロンギで36歳の生涯を閉じた。しかしキーツのような文学、芸術の視点で、ギリシャ文化に接したわけではない。下記のソネットには、ギリシャ・ローマ神話の世界を心から敬愛するキーツの姿を感じとれるのである。このソネットは1818年5月に書かれたものである。まだ作品としては未熟であるが、しかし彼の詩魂を揺るがすギリシャの女神を登場させていることは、ギリシア神話の詩想を示す物語詩「エンデミオン」(1817)と英文学史上、確固たる地位をキーツに与えたオード詩篇が書かれたあの‘驚異の年’1819年を結ぶイメージの橋渡しとなる。

‘Ode to Maia’
 Mother of Hermes! And still youthful Maia!
 May I sing to thee
 As thou wast hymned on the shores of Baiae?
 Or may I woo thee
 In earlier Sicilian?

この5行の詩行にみられる詩句はギリシア文化を暗示するのである。それを下記に示す。
 力のシンボルであるヘルメスの母、マイアは春の女神と考えられ、自然の再生を想起させる。因みにMay(5月)はこの彼女の名が由来している。

ギリシア人がシシリーに住んでいた頃には田園詩が栄え、earlier Sicilianはラテン語より古いギリシア語を暗示している。

下記の7行詩句には‘Ode on a Grecian Urn’の前兆がみられる。

Or thy smiles
 Seek, as they once were sought in Grecian isles
 By bard who died content in pleasant sward,
 Leaving great verse unto a little clan?
 Oh give me their old vigor, and unheard,
 Save of the quiet primrose and the span
 Of Heaven and few ears,

下記の三行詩句には詩人としてのキーツの有様を示すものであり、詩歌芸術の偉大さに畏敬の念をもつと同時に、女神マイアへの思慕を抱くキーツの姿そのものである。

Rounded by thee , my song should die away
Contents as theirs,
Rich in the simple worship of a day.

キーツの英文学の足跡を語るのに、オードを抜きにしては語れない。下記に取り上げる「ギリシアの壺に寄せるオード」は6大オードの中で、ギリシャ文化を称え芸術の神髄を語っている作品として、最適であろう。たしかにこのオードは一つの古壺に描かれた古代ギリシアの祭儀や伝説を眺めながら詩想がキーツに生まれてきたが、しかし、1816年大英博物館に収納されたエルギン大理石群の印象に基づいた芸術全般の恒久性を語っているものである。このオードは6連から成り立っている。各連の重要な個所を取り上げ、その内容について言及し、このオードの作品を鑑賞していく。

Ode on a Grecian Urn

< 第1連 >

Thou still unravish'd bride of quietness,
Thou foster -child of silence and slow time,
Sylvan historian, who canst thus express
A flowery tale more sweetly than our rhyme:

ゆっくりと刻まれた悠久の時を世情に穢れず、静かに時の流れを見守る芸術作品の壺は、人間の言葉以上に真理を我らに示してくれる偉大な存在であると、キーツは感じる。まさにこれは人工の壺である以上に、太古から大地を彩る大自然の推移を雄弁に語る語部である。

< 第2連 >

Heard melodies are sweet, but those unheard

この詩句は一見矛盾と思えるが、イメージの世界を彷徨するキーツにとってはそうでない。現実には耳にしたメロディーはその瞬間たしかに甘美ではあるがそれ以上それ以下のものではない。しかし壺に描かれた笛からの音こそが、イメージの世界に響き、消えること

がない。

Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on;
Not to the sensual ear, but, more endear'd

キーツが求めていたイメージの世界の偉大さと恒久性ではないだろうか、聴覚の世界に視点を置き、芸術作品の不滅を歌った連である。

< 第3連 >

Ah, happy, happy boughs! that cannot shed
Your leaves, nor ever bid the Spring adieu ;
And happy, melodist, unwearied,
For ever piping songs for ever new;
For ever warm and still to be enjoyed
For ever painting, and for ever young ;

この連には 'for ever' 「永遠に」という語句が多く見られる。それは '永遠性' への思いであり、願望でもある。人間の宿命である 'Man is mortal' 「人間は死すべきものである」と意識すればするほど、'永遠性' に恋う気持ちが強くなる。この連は第2連の視覚の世界から触覚の世界へ移行したとも取れる。

< 第4連 >

And, little town, thy streets for evermore
Will silent be; and not a soul to tell
Why thou art desolate, can e'er return.

この連にも 'thy streets for evermore' とあるように視覚を通して「静」の世界の永遠性を描いている。

< 最終連 >

Cold Pastoral !
When old age shall this generation waste,
Thou shalt remain, in midst of other woe
Than ours, a friend to man, to whom thou say'st,

Beauty is truth, truth beauty, – that is all

Ye know on earth, and all ye need to know.

この最終連は人間の儚さを芸術の永遠性と対比して表現したキーツの思想そのものである。最行二行句「美は真にして真は美なり。これこそがこの地上で彼が知る全てであり、また知らねばならぬ全てでもある」は、まさにキーツが求めていた美の崇高さと、宇宙の揺るぎない真美を表出した二行句で、これがキーツを世界の一流詩人とした要因である。

上島氏が彼の著『ロマン派詩選』（研究社、昭和42年）のキーツ詩についてテキストの詩で次のように、このオードの最終連を解説している。その部分を下記に引用する。

しかし詩人の目がふたたび壺に戻るとき、彼は厳粛なたたずまいに思わず人間的、時間的思考法を奪われる。彼は壺の非時間性のなかに呑みこまれる。そして時間を静止させ、すべての事象に永遠の＜現在性＞を与えるこの「静かな姿」こそ、詩的想像力の化身であり、美と真との統合原理であることに気づくのである。

キーツの最後の作品であり、恋人ファニー・ブローン嬢に充てたソネットがある。彼女がキーツからもらったキャリーの翻訳本ダンテの「神曲」に書き写したこのソネットはそののち世の多くの若者の心を捉えた。その理由はキーツが一人の女性を一途に愛し続け、愛の殉教者そのものであったがためであろう。下記にそのソネットを示してみる。

‘ Bright star ! Would I were steadfast as thou art (final version)

Bright star ! would I were steadfast as thou art —

Not in lone splendor hung aloft the night

And watching, with eternal lids apart,

Like nature's patient, sleepless eremite,

The moving waters at their priestlike task

Of pure ablution round earth's human shores,

Or gazing on the new soft-fallen mask

Of snow upon the mountains and the moors;

No — yet still steadfast, still unchangeable,

Pillow'd upon my fair love's ripening breast,

To feel for ever its soft fall and swell,

Awake for ever in a sweet unrest,

Still, still to hear tender — taken breath,
And so live ever — or else swoon to death.

このソネットには二つのversionがあることは、衆人の知るところである。この二つのversionには日付の相違が出てくるが、これはこのソネットを鑑賞するのには、それ程支障をきたさないと思う。ともかくキーツが愛する女性（Fanny Brawne）を想起してこのソネットを書いたのは間違いないのである。

このソネット全体に対して、松浦氏は彼の著Keats' Sonnets（吾妻書房1968年）の中で、的を射たコメントを記している。それを下記に示す。

ともあれ、*Bright Star*のFinal Versionは、異論なく、キーツの伊太利への死出の旅の途中、月明のDover海峡をわたる船の上で書かれたものである。夜の潮風に吹かれつつMaria Crowther号の甲板で、孤独と絶望の中で、星を凝視めつつ書いたこの詩は、星の恒久性に、自己の命と愛と芸術の久遠性を希いつつ、死んで行ったある若い天才詩人の最後をシムボライズした感動的な作品である。いわば、この詩は、キーツの薄命の一生を比類ない美しさで浮彫にし、最後の瞬間に、死や愛や芸術の苦悶から解き放された詩人の精神の‘crystalization’（結晶化）を示すソネットといえよう。

結 論

本論で3人の各詩人の代表作3点を観賞し、概ねその詩人の全体像が浮き彫りにされた。下記にその3詩人に対して、いくつかの観点からその詩人の「人となり」を検討し、彼らの相違点および共通点を指摘し、後期英国ロマン派（即ち完成期）の世界に残した彼らの生き方、人生観を足跡を整理することにする。

下記に後期ロマン派詩人で3詩人を3項目から検討・比較し、彼らの生きた時代を検証してみることにする。その3項目とは 1＜終焉の地＞ 2＜その人となり＞及び 3＜詩人としての全体像＞である。

バイロン（1788－1824）

- 1： ギリシャ独立戦争に義勇軍として参加したが、志半ばでギリシャのミソロンギにて病死。享年36歳であった。英国政府は彼のギリシャ独立戦争へ参加（実際彼は義勇軍を編成するために、私財をも投じる）を評価し、英国海軍の軍艦で遺骨は祖国英国に送られた。
- 2： 幼少の頃から母親の愛情の欠如を感じ、理想とする愛を常に求めていた。それ故に青年になったからは、ときには世間から非難されるような逸脱した愛の行為をす

るのであった。また見勝手な振る舞いをし、豪放磊落の態度であり、貴族のプライドを持ち個人主義とも言われる行動をとったが、ヨーロッパでは祖国程の非難を浴びなかった。この点ヨーロッパと英国の価値観の相違を感じるのである。

- 3： 最晩年は貴族としてのプライドも色あせて、かつての栄光もなく孤独であった。しかし人間への愛は決して衰えることはなかったのも、やはり彼は‘愛の詩人’として位置づけられるだろう。

シェリー (1792-1822)

- 1： リー・ハント一家をヨットで出迎えに行き、ピサを案内しその帰路スピッツア湾で嵐に遭遇し、ヨットが転覆したことで、彼は溺死したのであった。享年30歳であった。キーツと同じローマのプロテスタントの墓地に埋葬された。
- 2： シェリーは理想の社会を実現させるために行動を起こした詩人である。このような傾向はすでにオックスフォード大学の頃からであり、革命思想の影響を受け学内での政治活動の行き過ぎにより、ついに退学を大学から命ぜられた。彼は正義感の強く、直情径行型であったが故に他人と衝突をすることがあったが、友達思いであった。そのよい例として、4歳年下のキーツを大事にし彼の詩才を評価し、ついに彼はキーツが埋葬された同じ墓地に自分も埋葬されること願ったわけである。
- 3： 彼は実に誠実な人間であるが故に、理想と現実とのギャップに苛まれた詩人であった。シェリーはやはり自由を掲げ、魂の解放を唱えた‘自由の詩人’であった。

キーツ (1795-1821)

- 1： ‘驚異の年’と言われた1819年の初冬には、キーツの肺結核の症状がひどくなり、暖かい地への転地療養を考えざるを得なくなった。そこで彼が選んだのがイタリアであった。同年11月画家のセヴァンとともに、イタリアに向け出港。イタリアでの治療も虚しく、ローマのスペイン広場の階段脇に面したアパートの一室で、吐血し26歳の若さで死去。遺体はローマのプロテスタント墓地に埋葬された。(この後シェリーが同じ墓地に埋葬)
- 2： ギリシャ・ローマ文化に憧れたロマン派の詩人の中で、キーツの右に出る詩人はいないだろう。彼は詩想・詩作において、常にギリシャ・ローマ文化を取り入れ、芸術を通し真理を求め、思索と直感との独自の融合体を突き詰めた詩人であった。彼はすべての点において一途な求道者であった。愛においてはファニー・ブローンという一人の女性を生涯愛し続けた。
- 3： キーツはオードという詩の形式の完成者として、英文学史上に名を残している美の詩人である。やはり愛の詩人というより、むしろ美の殉教者と言ったほうが、似

つかわしいだろう。

＊

英国ロマン派は、初期・前期のロマン派詩人のブレイク、ワーズワスそしてコールリッジの代表三詩人と後期ロマン派詩人のバイロン、シェリーそしてキーツの代表詩人三人から成り立っている。前期の詩人たちは国内で活躍し、英国ロマン主義の礎を築き、後期の詩人たちはその基盤の上に立って、ヨーロッパ大陸へと飛翔したのであった。彼らはその意味でコスモポリタンの詩人となった。

三詩人が若くして地中海を囲むギリシャ・イタリアで命を落としたということは、彼らのギリシャ・ローマ文化への回帰でもある。それはわれわれに魂の解放による自由の獲得を示唆してくれたのである。三詩人があこがれていたギリシャ・ローマ文化は、永遠に光を放っており、その光は愛・自由そして美を我々に喚起させてくれる光の混合体であり、英国ロマン主義の諸相を我々に照らしてくれ不可欠な存在である。

以上

< 追記 >

作新学院大学の紀要創設から今日まで長年に亘って紀要に投稿させて頂き、感謝申し上げます。私にとりましては、今回が最後の投稿となりました。思えば故阪本先生の下で、私たち若手が紀要委員を務め、なんとか第一回目の紀要を発行した当時が懐かしく思われます。因みに私の手元には、セピア色の思い出と共に、初期の手書き原稿用紙があり、四半世紀が過ぎました。

どうか今後も作新学院大学の紀要が、各学界に貢献することを切に望みます。

参考文献

- 1) Peter Quennell : Romantic England Writing and Painting 1717-1851 (Waiden field & Nicolon)
- 2) 上島建吉：解説注釈『ロマン派詩選』（研究社小英文叢書、昭和59年10月）
- 3) 佐藤 喬・徳永暢三 編注者『英米抒情詩の珠玉 [改訂版]』（英潮社新社、昭和56年10月）
- 4) 松浦 暢著『KEATS' SONNETS』（吾妻書房、1968年9月）
- 5) 土居光知・斎藤 勇 解説注釈『シェリー抒情詩抄』（改訂版）（研究社小英文叢書、昭和59年11月）
- 6) 小池滋監訳・植松靖夫訳『イギリス物語』（東洋書林）